滑稽俳句と私

金澤　健
（第三回、第四回滑稽俳句大賞受賞）

五十歳の時、「老後の趣味を持とう」と、一念発起し、趣味選びに邁進しました。消去法で絞り込んでいき、最後に残ったのが、俳句と川柳でした。どちらか一つに決めきれず、双方の専門誌に投句していましたが、成果はさっぱりで、どちらの雑誌にもまったくと言っていいほど選に入ることはありませんでした。

そのような時、俳句の解説書で、「俳句も川柳も、俳諧という同一のルーツを持つ文芸である」という一文を目にし、閃くものがありました。「そうか、俳句と川柳は同根の文芸なのか。そうであれば、両者は別々のものとはいっても、どうしても重なり合う部分がある筈だ。その分け難く重なり合う領域に、自分の句風を確立するよう努力してみよう。そうすれば、俳句と川柳を別々にではなく、同時に趣味として楽しめる」と思い到った次第です。

とはいったものの、「俳句と川柳の重なり合う部分とはどこか」は、はっきり自覚出来ていた訳ではありません。そこで、有名な俳人、川柳作家の作品集を手当り次第読み漁り、自分なりの感触を得ようとしました。何年かの乱読の後、朧気に見えてきたのは、「人の世も、自然界もきれい事だけで成り立っている訳ではない。いかがわしい部分がかなりある。そこに気付き、ユーモアとペーソスで、五七五で表現する」部分で、両者は重なり合うのではないかということです。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

じゃあそれで俳句を作ってみようとなりましたが、「分かっちゃいるけど…」というやつで、なかなか自分の理想とするような句が作れません。思いつくたびにノートに書き留め、暫くしてから読み返すという、試行錯誤の期間（習作期とでもいうのでしょうか）が、又々何年か続きました。

習作を繰り返すうちに感得したのは「をかしさに潜む悲しさ」「悲しさをつき抜けたところにあるをかしさ」ということです。自分はそれに気付き、「をかしみ、悲しみ一如の句作り」を目指そうと、勘所を悟ったような気がしました。

あとは、自分の句を発表したいとの気持ちが高まってきました。そのような折、新聞紙上で、八木滑稽俳句協会会長の「滑稽俳句ルネサンス」という一文で、滑稽俳句協会の存在を知り、即刻、協会に問合せました。八木会長の協会設立挨拶の、「滑稽を俳句に取り戻し、存在感を高め、滑稽句について追求することを目指す」という目標に大いに賛同し、これぞまさに自分の目指す句作りであり、滑稽俳句協会こそ、自分の俳句発表の場にふさわしいと思い、早速入会致しました。

幸い自分の判断は間違っていなかったようで、大いに投句を楽しませて頂いていますし、滑稽俳句大賞という御評価も賜わり光栄に思っています。これからも、滑稽俳句協会の目指す目標と、自分個人の目指す目標を同一と心得、大いに頑張らせて頂く所存です。今後とも宜敷く、御願い致します。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。